

学校での豊かな学びから自己確立へ

1. 教育を考える一言

「君たちは、人数が多い。何事もきちんとした考えを持って取り組まなければ、最終的にお墓に入れない！」

2. 背景

小学校5年生の時の担任の先生が、語られた言葉で、衝撃的な言葉として心に刻まれています。人間は、地域・学校・家庭等、複雑に人々とかかわり生活しています。環境によって、大きな差が生じます。生活している過程で、誰に出会い、何を語り、考えたかによって、内面的な営みが異なります。出会った人の言葉は、時には優しさを感じ、また、心が冷凍状態になるようなこともあります。

担任の先生は、子どもたちの将来を思い、語ったに違いありません。子どもたちを最悪な状態にしたいという思いが裏側にあったと思います。そうでなければ語れません。先生の愛情表現です。親はここまで表現しません。

集団の中で、切磋琢磨を知らず知らずしています。生きることは、努力することです。自分らしく生きること懸命であることによって磨かれ、将来に繋がります。それは力や技術であり、子どもの独自性に繋がりをもちます。どのような考えによって、時を刻むかに全てがかかっていると言っても過言ではないのです。何をどうすれば、よりよくなるかを考えることです。人は知性を働かさなければ、問題が山積みになります。それ故、考えれば、よりよくなるかと言えば、そうではありません。この点が難しく、人生そのものと言えます。生きてみなければ、わからないのです。それだけに何を描くかは、人生の主演の「私」が決断し、描いていきます。力強く描くことの意味は、大きいです。

3. 考察

学校とは『学校でしか学べない豊かな学び』を成立させようとする場（鹿毛雅治『子どもの姿に学ぶ教師』教育出版、2007年、p.146）と考えられています。それは子どもと教師が出会い、体験を通して気づいたり、感じた様々なことをともに振り返ることを通し、互いに問いを生み出しながら探究を深めていくような学びの成立を目指すことです。

アメリカの心理学者アブラハム・マズローは、人間を突き動かす欲求を五段階に分け、「下から、生理的欲求、安全の欲求、帰属の欲求、自我の欲求、自己実現の欲求」（菅原裕子『10代の子どもの心のコーチング』PHP研究所、2010年、p.225）としています。自己実現の欲求は、あるべき自分になりたいという欲求のことです。

自己の確立は、大切な営みです。自己を創り上げ、一部を崩し、「私とは何か」と問いかけ創造します。人間とは芸術であり、教育も芸術です。人間の可能性を信じ、こだわりを持って継続して努力することは、自立への道に必要です。そこに知的好奇心や向上心があり、人間としての力を得、道を踏み外さぬよう生きることが大切です。学校教育を通し、多くのことを思索するが、それは言葉が基になっていると考えます。

参考文献

小林秀雄 岡潔『人間の建設』新潮社、2010年

鹿毛雅治『子どもの姿に学ぶ教師「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」』教育出版、2007年

菅原裕子『10代の子どもの心のコーチング』PHP研究所、2010年